福岡県ホームページでは、
里山の保全再生に関する様々な情報を掲載しています。
例えば‥

- 県内の取り組み事例が知りたい。
- 里山の保全活動に参加したい。
- 里山保全に関する研修会に参加したい。
- 里山保全のノウハウを知りたい。

‥‥など

詳しくは、下記にクリックしてみてください。

福岡県自然環境課　検索

問合せ先

福岡県環境部自然環境課

〒812-8577福岡市博多区東公園7番7号

TEL : 092-643-3367

E-MAIL : shizen@pref.fukuoka.lg.jp

※このパンフレットをホームページからダウンロードすることができます。
また、ご意見・ご感想をお寄せください。

発行 : 福岡県環境部自然環境課

作成 : 福岡県自然保護思想普及パンフレット編集委員会

発行日 : 平成21年3月

デザイン : ADBOX

写真提供 : 池田浩一・甲斐満男・河野勲・小森耕太・佐々木公隆・志賀壮史・須田隆一・田村耕作・出川真也・福田隆一・矢﨑正躬（敬称略、50音順）

イラスト : 永松愛子

自然希求
里山

魅力いっぱいの身近な自然

福岡県

里追想

懐古、そして次世代の思い出づくりへ

「里山」それは私たちが古くから親しみ、生活をともにした心の原風景です。

雑木林や水田、ため池では、木々の伐採、農作業など様々な人の働きかけによって、独特の自然環境がつくられてきました。そこは、多種多様な生きものの宝庫であり、私たち人間にとっても自然とふれあえる身近な場所です。

その里山は、過疎化や開発によって、消失、荒廃が進んでいます。

福岡県では、この里山の自然を次の世代に残していくために、まずは里山の魅力を知っていただくことが大切と考え、里山の自然を強く希み、求める－自然希求－の言葉に託しました。

男の子焼の里（八女郡立花町）
撮影者：甲斐 満男
「100年後に残したい福岡の里地里山フォトコンテスト 最優秀作品」

兎追いし　　かの山
小鮒つりし　かの川
夢は今も　　めぐりて
忘れがたき　　故郷

故郷
（詩：高野辰之　曲：岡野貞一）

誰もが知っているこの童謡に、故郷への郷愁をかきたてられる人も少なくないと思います。

民家の裏山には雑木林、麓には田んぼが広がり、小川がその横を流れている。雑木林では虫たちが樹液に集まり、田んぼではカエルの合唱、小川ではホタルが舞っている・・・子どもの頃に遊んだ思い出が、そんな里山の風景とあいまって、私たちの心に、故郷の情景としていつまでも残っているのではないでしょうか。

今、里山の魅力が脚光を浴びつつあります。里山を単なるノスタルジーの対象としてではなく、今の子どもたちにも、里山での楽しい思い出を与えてあげることはできないでしょうか。

里育て

人々が時間をかけて育んだ美しい自然

里山は、奥山の原生的な自然とは対照的に、都市近郊や集落周辺など身近なところに広がっています。里山を構成する自然は、雑木林や田畑などに代表されるように、人々が長い時間をかけてつくりあげてきました。里山の四季折々の表情は、そこに住む人々の生活感や生きものたちのにぎわいとともに彩られています。

春

夏

秋

冬

今やこのような里山の風景も少なくなりました。高度経済成長期以降、里山を取り巻く環境は、過疎化や開発によって大きく変貌しています。

しかし、その一方で、近年の環境問題や自然保護への関心の高まりのなかで、これまであまり知られていなかった里山の地域に果たす役割が再認識されつつあります。

また、価値観の多様化を背景に、自然体験や余暇活動の場、あるいは都市住民の新たな居住空間など、里山の新たな役割にも期待が集まっています。

里山の定義は、地理や、植生、社会文化的背景など視点によって様々な考え方がありますが、このパンフレットでは、環境省による次の定義を「里山」として用いています。

「里地里山」

奥山と都市の中間に位置し、集落とそれを取り巻く二次林、それらと混在する農地、ため池、草原等で構成される地域概念。

※このパンフレットは、二次林＝雑木林として扱います。

コラム 1

県内の里山の分布状況

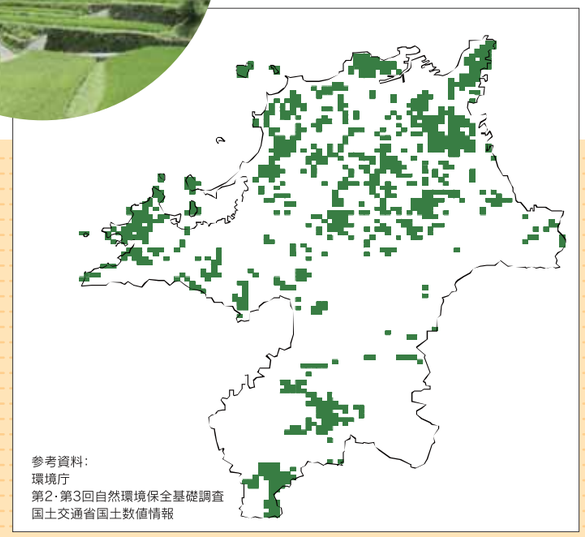
福岡県内ではどのような地域が里山といえるのでしょうか。

一定の条件で抽出したところ、県土面積の約2割が里山と呼ばれる地域に該当することがわかりました。

里山の捉え方は様々ありますが、ひとつの参考になると思います。

里山の抽出条件

① 雑木林が優占する地域
② 農地が優占し、かつ雑木林がある地域
③ 草原が優占する地域



参考資料：
環境庁
第2・第3回自然環境保全基礎調査
国土交通省国土数値情報

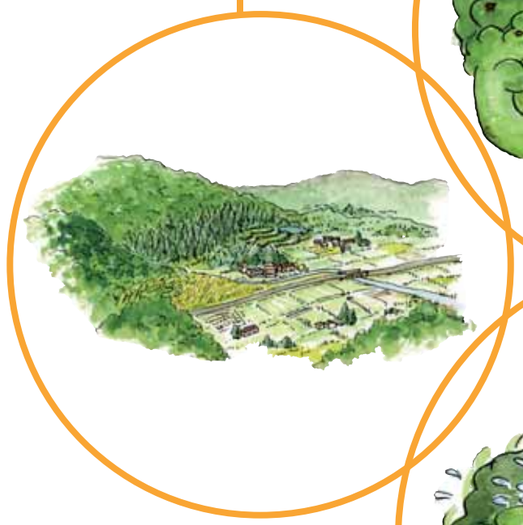
里知り

人と自然が共生する場所 里山

景観の形成

里山の特徴的な景観は、田畑や雑木林、集落などが混在していることに加え、そこに住む人々の生活感が相まって、四季折々の様相をみせてくれるところにあります。

そこには、私たちにとって、どこか落ち着く懐かしい風景が広がります。



水・土壌・大気環境の保全

里山を構成する雑木林やため池は、洪水を防いだり、渇水時に備えて水を蓄えたり、水質を浄化する働きがあります。

また、雑木林には土砂の崩壊や流失を防いだり、光合成によって二酸化炭素を吸収したりするなど大気を浄化する働きもあります。

生物多様性

野生の動植物は、奥山などの原生的な自然のなかで生きていくものもあれば、人の手が加わった環境でしか生きていけないものもあります。環境省の調査では、メダカ、ゲンゴロウなど絶滅危惧種の約5割が、里山で生息する生きものとされています。

田畑を耕し、雑木林の手入れをすることは、限られた空間に様々な遷移※段階の植物群落を生み出します。この植物群落の多様性は、水田やため池などの水条件と相まって、多くの動植物が生息できる環境をつくりだしています。

※遷移‥クヌギ・ナラなどの雑木林は、木が大きくなり過ぎると、林の中が薄暗くなり、シイやカシなど日光をあまり必要としない幼木だけが育つようになります。時間の経過とともに雑木林はクヌギなどの落葉広葉樹からシイなどの常緑広葉樹に変化していきます。これを遷移といいます。

自然とのふれあいの場

身近な自然が少ない都市住民に、様々な生きものと接する機会や、農林業体験などの機会を提供してくれるのも里山の特徴です。また、子どもたちが健全な感性を育むうえで、動植物や季節の移ろいを感じさせる風景に、ふれることは大切です。

里山はそういった自然体験や環境学習、情操教育の場を提供してくれます。

生活文化の伝承

里山は、地域の文化を伝承する炭焼きやしめ縄作り、また、地域の食材が織りなす多様な食文化などをささえています。

地域色豊かな豊穣祈願の祭事なども、季節の風物詩として、私たちの情感を潤してくれる里山の文化のひとつです。

コラム 2 子どもたちと自然体験

小鳥のさえずり、若葉の香り、風に踊る木漏れ日など、自然のなかには人間の五感をくすぐる刺激であふれています。

人間の大脳がもっとも発達する幼児期に外界刺激を五感で敏感に受け取ることは、豊かな感性を育むうえで大切なプロセスといわれています。しかし、子どもたちを取り巻く環境が大きく変化した今日では、昔のように、気軽に自然のなかで遊ぶ機会をもつことは難しくなっています。

興味深い現象として、「赤とんぼは好きですか」との問いに50歳以上では8割以上が「好きだ」と答えたのに対し、20歳代では8割が「何とも思わない」と答えています。自然体験の差が、生きものに対する情感の差に現れているかもしれません。

大人の価値観の中で生きていかなければならない子どもたちですが、少なくとも子どもたちが自分で赤とんぼやカブトムシを捕らえることができる、そんな自然を守り残すことは、今の私たち大人の責務ではないでしょうか。

里憂い　失われゆく里山の姿

消失する里山

高度経済成長と都市化にともなって、住居やゴルフ場などのリゾート地、工業用地の需要が高まっていきました。

里山はもともと山奥にあるのではなく、人々の暮らしと近い所にあったことから、真っ先に開発の対象となりました。

荒廃する里山

石油や化学肥料が容易に手に入るようになると、薪や炭、肥料用の落ち葉が採取されなくなり、雑木林は放置され、荒廃が進むようになりました。

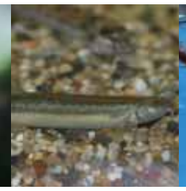
また、農業者の高齢化や担い手不足などにより、耕作放棄地が増えています。それに伴い、水路やため池も管理放棄され、水深が浅くなったり、陸化が進行しているところが増えています。

絶滅のおそれのある里山の生きものたち

一昔前まであたりまえのように里山で出会えた生きものたちも、今では簡単に見つけることができなくなってきました。

カブトムシやクワガタなど雑木林の人気者も、子どもたちが目にする多くのものは店で売り出されているのが現実なのです。

メダカ


ドジョウ

ゲンゴロウ

タガメ

オオムラサキ

カスミサンショウウオ

トノサマガエル

イシガメ

リンドウ

キキョウ

自然のままに・・・では生きられない里山の生きものたち

手入れの行き届いた棚田

耕作放棄された棚田

稲作をやめた水田は、3～4年もするとセイタカアワダチソウなどが生い茂る草地になります。見た目には自然が戻ったように見えますが、そこにはカエルやメダカもすめません。かつての日当たりの良い田んぼや、水路といった水条件がもたらした植物や水生動物たちの王国は、次第に失われていきます。

雑木林についても、かつては10～20年おきに伐採され、炭や薪に利用されていました。また、林床は、堆肥用に落ち葉かきされ、見通しのきく明るい林でした。そのような林にカブトムシやシュンランなどさまざまな動植物がすんでしていました。

しかし、雑木林に人の手が入らなくなると、林床は笹などが茂り、これらの生きものたちが、すめない林となります。

里山の生きものたちは、長い年月をかけて人々が育んできた里山という自然の中でこそ、すみ続けることができるのです。

管理された雑木林

放置された雑木林

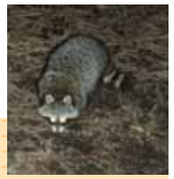
コラム 3 里山に侵入する外来生物

もともとその地域にいなかったのに人間活動によって他地域から入ってきた生物のことを外来生物といいます。

私たちは、農作物や家畜、ペットなどたくさんの外来生物を利用していますが、一方で、意図的に放したりして、野外で繁殖してしまうものもいます。このような外来生物はもともと里山にいた生きものたちを捕食したり、日光など生育に必要な環境を奪い取ったりして、生態系に大きな影響を与えています。

一度、定着（帰化）してしまった外来生物を排除するのはとても困難です。ペットや観賞用として飼っている動植物をむやみに捨てない心がけが必要です。

ブラックバス


アライグマ

ブラジルチドメグサ

ミドリガメ
（ミシシッピーアカミミガメ）

里守り　人々の輪で里山を守る

人々のつながりで 里山がよみがえる

里山は、長い間、稲作や炭焼き、落ち葉による堆肥作りなど、人々が自然の恵みを利用するために、絶えず手を入れることで維持されてきました。しかし、薪から石油へ、堆肥から化学肥料へと人々の暮らしが変化していく中で、多くの里山が荒廃していきました。

里山は、人々の暮らしとともに息づいてきた自然環境です。そのため、里山を守り育てていくためには、そこで生活する人々の暮らしを無視することはできません。この点が、屋久島や白神山地といった原生林を守ることと大きく異なり、里山の保全を難しいものにしています。

しかし、人々の自然への関心が高まりつつある昨今では、次世代に豊かな自然を残していきたいと考え、行動する人々が増えてきました。各地で様々な保全活動が起こり、再生した里山も少なくありません。

荒廃した里山を都市と農山村の共同で保全

山村塾（福岡県黒木町）

棚田や茶畑が美しい中山間地の黒木町では、高齢化や担い手不足により、農地や山林の荒廃が進んでいる。

「山村塾」の椿原代表は、郷里で農業を継ごうとUターン。変わり果てた景観に心を痛め、昔の美しい棚田を取り戻そうと、1994年に仲間とともに「山村塾」を設立した。また、取り組みを更に発展させるため、周囲の心配を他所に、借金をして農林業体験交流施設「四季菜館」を建設した。

里山の大切な機能を発揮させるためには、人の手入れが不可欠であり、農地を手放さない、荒廃させないためには農家が経済的に自立していく必要がある。

山村塾では、農林業体験を通じ、都市住民に農山村の自然や里山保全の必要性や魅力を伝えることで、農林作業を手伝うボランティアが増え、里山で育った農産物を買い支える輪が広がるなど、農山村の応援団を増やす取り組みに育ってきた。

都市と農山村が手を組み、農林業を通してともに自然環境を守っていく。里山に活気を呼び戻す山村塾の取り組みは、今や地域になくてはならない存在となっている。

棚田の石垣修復

棚田で田植え

炭焼き

都市住民の憩いの森を保全

こうのす里山くらぶ（福岡市南区）

同団体の活動場所は、福岡市中央区と南区の境にある鴻巣山特別緑地保全地区。

会員は年齢も性別も住所も様々で、地元住民は半数程度。ある程度経験が必要とされる高木の間伐から伐採木の解体、さらに秋の恵みであるマテバシイのどんぐり拾いなど幅広い活動を月1回のペースで続けている。老若男女誰もが自分にできる範囲で作業に関われるところがいいところと志賀代表。作業しながらの世間話や、冬場のあったかい鍋を囲んでの昼休憩など、仲間づくりの場としても大切な活動となっている。

志賀代表によれば、社会貢献意識や使命感というよりは「楽しみ」が活動の主な目的になっているという。気分転換のため、健康づくりのため、学びのため、子育てのため。会員それぞれが自分なりの楽しみややりがいのために活動に参加している。もちろん活動が「楽しく」あるために、安全管理に最も重きを置かなければならないのはいうまでもない。

うっそうとした常緑広葉樹の暗い森が、手入れされることによって光が差し込む散策しやすい憩いの空間になる。楽しみながらゆっくりと、だが着実に、季節感あふれる豊かな森づくりが進められている。

「なんもないムラ」の見つめなおしが日本一元気な村を生み出した

地域運営学校（任意団体） 角川里の自然環境学校（山形県戸沢村角川地区）

山形県の山深い農村「戸沢村角川地区」。ある時までは、深刻な過疎や高齢化に悩む、ごくありふれた農村だった。しかし、今では人口の数倍もの人が1年間で訪れる。

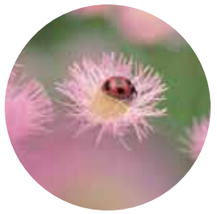
農林業以外目立った産業もなく「なんもないムラ」と住民も卑下していた村を、1人の大学院生が実践した「地元学」と呼ばれる地域おこしが大きく変えたのである。

地元ではほとんど省みられることのなかった場所が、貴重な動植物の生息地として新たに注目される。村民は「家の裏山が?」と驚きの声を上げ、目を輝かせて案内役を買って出る。

また、お年寄りが生き生きと地域の伝承を語り、女性会では講習会を開いて郷土や伝統料理を披露する。最初は「本当におらだでできるのか」と心配していた地元の人たちも、次第にふるさとに対する誇りを感じるようになり、そうした自然や生活の技を地区内の子どもたちにはもとより、全国から訪れる子どもたちにも伝える活動に取り組むようになってきた。今やその動きは大きなうねりとなり、地域全体に自信がみなぎっている。

いま、かつて里の自然環境学校で遊び学んだ地元の若者たちの中から、角川に留まり暮していこうと決意する人もでてきている。進学や就職のため若者のほとんどが出て行ってしまう中、地区にとっては画期的な出来事だ。地区に留まろうとする若者が、本当にここで生計を立てていくことができるのか、角川地区の挑戦は今も続いている。

荒れるにまかせた田畑や雑木林‥　里山の土地所有者も、出来ることならば先祖から受け継いだ土地を美しく守っていきたい‥そう望んでいるはずです。

これからの里山を守っていくには、地元では当たり前すぎて気づかれなかった魅力（動植物の宝庫、人々の心の安らぎ、子どもたちの遊びの体験場など）を掘り起こし、より多くの人々の関心を高めていくことが大切です。里山をそれに関わる多くの人々の共有財産として位置づけ、地元住民や都市住民、学校など多様な主体でボランティアなどのネットワークをつくり、多くの人で守り利用していくことが求められています。

このような里山保全の動きは雑木林や田畑の維持管理だけでなく、地域の活性化や村おこしにつながる可能性も秘めている新しい取り組みとして注目を集めています。